

# FD NEWSLETTER



## CONTENTS

- 夏のファカルティ・デベロップメント  
入学センター所長  
法学部教授 熊谷 芝青
- 2018年度「公開授業」の実施について  
■私の公開授業～理論の役割  
経済学部教授 館 健太郎
- 公開授業を終えて  
法学部教授 山崎 望
- 「ゼミ活動と市民先生」  
経済学部准教授 松本 典子
- 「身近な授業に活かせる反転授業」  
—平成30年度第4回FD研修会報告—
- FD推進委員会今後の活動予定

## 夏のファカルティ・デベロップメント

入学センター所長  
法学部教授 熊谷芝青

酷暑の夏の5日間、本学でオープンキャンパスが開催された。オープンキャンパスの目玉は、なんといっても、「模擬授業」であろう。連日、「模擬授業」の様子を拝見して回った。ベテランの先生方が自家薬籠中の得意分野で学問の面白さを展開すれば、フレッシュな先生方が意欲的な工夫によって学問の興味を掻き立てる、といった学問の百花繚乱の様相を呈していた。「模擬授業」を数日前から予約し待ち望んでいた高校生等の期待に十分に答えていただいたことは、アンケートの回答の中から伝わってくる。先生方のご尽力に心から御礼申し上げます。

それとともに、近年のオープンキャンパスで顕著であるのは、保護者が同伴していることである。我を忘れて「模擬授業」に釘付けになっている高校生に対して、保護者は、客観的に、冷静に「模擬授業」を聞いている対照的な姿に気づかされる。保護者にとって自分の子ども等を本学に十分に託すことができるだろうか、と吟味しているのだろう。

ファカルティ・デベロップメントは、講義内容を改善・向上させるための組織的取組のことであると理解している。その一環として、教員相互が参観する公開講義が行われ、その後に、アンケートによる講評が本学で行われるようになって久しい。自ら属する学科以外の、他学部・他学科の講義に参加させていただくと、自分の専門領域と異なる視点からの切り込みや検討方法等に驚かされると同時に、今後の講義へのヒントとなるものを教えられる。またアンケート結果には思わぬ弱点の指摘等があるが、その後の講義の改善に活かされることになるだろう。

とすると、教員の代わりに保護者や高校生等が参観する公開講義が行われ、その後にアンケート講評するというオープンキャンパスにおける「模擬授業」は、まさにファカルティ・デベロップメントが行われているといえよう。高校生等の好意的な視点と、保護者の批判的な視点という「模擬授業」の要素を含んでいるからである。今夏の「ファカルティ・デベロップメント」は成功裏に終了した。来夏の「ファカルティ・デベロップメント」にも大いに期待したい。

## 平成 30 年度公開授業の実施について

平成 30 年度「公開授業」を以下のとおり実施した。「公開授業」は、授業改善のための教員による相互研鑽を目的とし、工夫に富んだ授業に接し、その体験によるさまざまな発見を通して、今後の授業改善のためのヒントを得ることにある。

公開授業は、各学部等の F D 推進部会のご協力により、各学部等主体にて実施された。

学部	担当教員	実施日	時限	教場	科目名称
仏教学部	松田 陽志	11/28 (水)	3	禅研一坐禅堂	坐禅
	藤井 淳	11/27 (火)	3	8-258	仏教漢文入門
		12/5 (水)	2	8-258	基礎演習
文学部	北原 賢一	12/1 (土)	2	3-303	英語演習
経済学部	宮田 惟史	11/14 (水)	3	1-301	経済学史 b
	石川 祐二	11/20 (火)	3	1-401	管理会計論 b
	舘 健太郎	11/30 (金)	2	1-401	産業組織論 b
法学部	高田 実宗	12/6 (木)	1	8-255	行政法
	山崎 望	11/28 (水)	1	8-255	政治学 (国際社会と日本)
経営学部	福田 慎	11/27 (火)	1	1-202	金融論
	菅野 佐織	11/30 (金)	1	3-211	消費者行動論
医療健康科学部	藤田 幸男	11/27 (火)	2	3-206	放射線関係法規
GMS 学部※	朴 正洙	11/21 (水)	4	8-150	マーケティングコミュニケーション
	平井 辰典	11/19 (月)	3	1-402	Web コンテンツデザイン各論
総合教育研究部	山本 敏子	11/29 (木)	6	3-312	教育実習指導
	出井 章雅	11/12 (月)	3	2研-101	生涯スポーツ実習
	三好 俊介	11/27 (火)	3	7-303	ロシア語 I A b

※GMS 学部＝グローバル・メディア・スタディーズ学部

## 私の公開授業～理論の役割

経済学部 教授 館 健太郎

先日「産業組織論 b」の公開授業が行われました。産業組織論とは、個別の産業における企業同士の競争やその消費者への影響などについて学ぶ科目です。さらに、産業の課題が明らかになった場合には、それを克服するための経済政策についても検討します。

ところで、こうした議論を行うにあたって、「経済モデル」と呼ばれる理論を用いることがこの科目の特徴となっています。したがって、科目の性質上、どうしても話が抽象的になる傾向があるため、内容を理解しにくいという問題点があります。それに加えて、「無数の企業が同じ商品を供給しながら競争している状態」とか、これとは対照的に「ライバル企業がまったくいない状態」などと、経済モデルには極端で現実とかけ離れた設定が多く、「こんなありえない話を聞いて意味があるのだろうか？」と疑問に思う学生が出て不思議ではありません。

そこで、私はできるだけ多くの具体例を紹介するように心がけているのと同時に、理論の意義について時間をかけて説明するようにしています。そのときに強調していることは、理論は「おとぎ話」と似ている部分があるということです。おとぎ話は子どもたちに生きる上で大切な教訓を伝えようとした先人の知恵が凝縮された物語であり、理論もまたものごとの本質を明確に示そうとしたものだと考えるからです。

おとぎ話の特徴は、例えば「むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。」から始まる「桃太郎」の話のように、時間や場所、人物を特定しない抽象化された世界が舞台であることや、桃太郎が鬼退治に出かけるときにお供をする犬や猿、キジのように動物がしばしば登場することです。おとぎ話では、重要でない部分はすべて捨象される一方で、重要な部分については動物や植物などに象徴させながら強く印象に残るように語られています。一説によれば、犬は誠実さ、猿は知恵、キジは勇気、そして3匹の鬼は欲や怒り、愚痴の心を表したものであり、「桃太郎」は「すぐれた徳を磨いて己の弱い心を克服して立派な大人になりなさい」ということを教えたものだと言われています。

産業組織論においても、さまざまな要因が複雑に絡み合う現実の競争について観察する前に、まずは極限の競争状態というフィクションを想像することから始めることで、かえって競争の本質を深く理解できるようになるのです。



(館 健太郎 先生 公開授業)

## 公開授業を終えて

法学部 教授 山崎 望

2018年11月28日の1限に「政治学(国際社会と日本)」の公開授業を行いました。履修者数は192名で1限の講義にも関わらず、毎回出席率が高い講義となっています。公開授業では「民主主義の危機と『改憲』」と題して、先週からの継続性を持つ講義として民主主義の危機についての学説に言及し、その上でC・シュミットという政治思想家の例外状態論を紹介し、それを現代日本の改憲をめぐる論点の一つである「緊急事態条項」につなげて解説しました。

講義を通じた工夫としては、毎週レジュメを配布し、受講生には前週の段階で自由民主主義の歴史的な過程を学習してもらい、自宅で民主主義の規範的な意義についてミニレポートの作成と、視聴覚教材として「緊急事態条項」について取り上げたニュース映像の視聴を課題とし、公開授業の時間内に小クイズへの解答をさせています(翌週に講師から応答する)。このようなアクティブ・ラーニング的な手法を導入することで、講義時間・場所に限定されず、また講義に連続性をもたせています。

しかし反省点も挙げられます。第一に欠席者・遅

刻者も一定数いることもあり、全員が連続性を持った講義を受講しているか、は疑問です。また課題に応じてくる学生も一定数に限られます。要因についても受講生の怠惰ではなく、経済的困窮からのアルバイト時間の多さなどの問題も多々あり、総合的な分析が求められるでしょう。

またレスポンスカードを使った応答では、講師主導の形態となってしまう、本格的な少人数講義と比べると、相互応答性は落ちてしまいます。TAの導入など工夫を検討しつつも、履修者が多学部にあたる本講義のような場合には、背景となる知識もかなり異なるため、議論自体が難しい側面もあり、現状ではアクティブ・ラーニング化には成功しておりません。

第三に、これが最も大きな問題だと思うのですが、本講義は知的好奇心が高い多くの受講生に恵まれている科目とはいえ、履修者の間における基礎的な知識の多寡、論理的な思考法の習熟度、政治や社会などへの関心の強弱といった様々な「格差」があり、分断を生み出しています。公開講義終了後に、講義を踏まえて出した課題への解答(レスポンスカード)を見る限りでも、一方でシュミットの自由主義批判の問題点を指摘する履修者や日本の「改憲」動向について論理的な考察を記す履修者がいる一方で、「憲法」と漢字で筆記することができないと推測される履修者や、三権分立の意味を理解していない履修者もあり、「履修者全員」に対して統一的な講義をして、どのような教育効果が得られるのか、も講師としては悩みです。

今後とも学生の声に耳を傾けつつ、時代に適した、より良いと思われる講義を模索していきたいと考えています。様々なご意見をお待ちしております。



(山崎 望 先生 公開授業)

## 連載企画：よりよい教育のために

### 「ゼミ活動と市民先生」

経済学部 准教授

松本 典子

2007年から非営利組織論を担当し、ゼミではNPOや協同組合などを研究対象に、非営利組織の組織論・企業論に関する研究・教育を行っています。

2年生は、非営利組織に関するテキストを輪読し、NPOや協同組合への訪問インタビュー調査を通じて研究の基礎を構築し、2年生から3年生にかけては、大学の立地を最大限に活かし、世田谷区内でさまざまな活動を展開していきます。今年は、三軒茶屋の「世田谷アートフリマ」におけるワークショップの企画・運営、桜新町商店街で行われた豊丘村の物産展への参加、用賀で毎年8月末に地元の大学生が企画・運営する「用賀サマーフェスティバル」への参加、用賀商店街の「ようが屋台村」への参加、二子玉川の「いちにち商店街」への参加を実行しました。

「継続的に地元の人や非営利組織に関わる」を合言葉に、本年度は4つのプロジェクトも実行しました。2年生は、全員が用賀のNPO法人 neomura が運営する「neobar (ネオバル)」の日替わり店長になって、「いぶりがっこプロジェクト(秋田県大仙市で障がい者がつくるいぶりがっこの生産を手伝い、商品開発・販売も行う)」「らいちプロジェクト(宮崎県産のライチを販売して知名度をあげる)」などを実施しました。3年生は3チームあり、動画チームはワーカーズ・コープやパルシステム東京などが運営する「よいしごとステーション(協同組合の求人・講座紹介の専門サイト)」の動画づくりを行いました。台所チームは、深沢の空き家をDIYしてコミュニティスペースにした「ふかさわの台所」にて、「世田谷産おにぎりプロジェクト(区内の農家の野菜を活用し、料理が得意な人たちの指導を受けてつくるおにぎりのランチ会イベント)」を実施しています。MAPチームは、駒沢・深沢地域のカフェMAPを作成しました。

以上のように多岐にわたるプロジェクトを同時並行で実施していますが、これを教員一人ですべて指



導するのは至難の業です。そこで、「市民先生」と一緒にゼミを行うことで、すべてのゼミ生が力を十分に発揮できるような仕組みをつくっています。たとえば、ふかさわの台所主宰の成見ご夫妻は、「なぜそれをやりたいの?」と常に学生に問いかけ、いつでも学生のやりたいことに真剣に向き合ってくれます。その結果、最初とは全く異なる素晴らしいイベントが創出されたり、イベントをやり遂げることによってチームの仲が深まるなど、地域にとっても学生にとっても良い結果がもたらされます。

「地域の子どもは地域で育てる」とよく言われます。ここ数年のゼミ活動を通じて学生の生き生きした様子を見る度に、大学生の教育を大学だけで完結させるのではなく、地域の人たちの協力を得て発展させていくことが重要だと痛感しています。世田谷には学生を育てられる素晴らしい「市民先生」がたくさんいるのです。

地元で若者の将来を真剣に考えてくださる「市民先生」には経済学部現代応用経済学科ラボラトリを支える研究員にもなっていていただいておりますが、このあたりの話はまた別の機会に。

## 平成 30 年度 第 4 回 F D 研修会報告

### 「身近な授業に活かせる反転授業」

第 4 回の F D 研修会が 11 月 6 日 (火) の 17:00～18:30、3-309 教室で開催された。今回の講師は、篠原正雄先生(総合教育研究部自然科学部門教授)と、西村祐子先生(総合教育研究部外国語第一部門教授)のお二人である。参加者数は教職員合わせて 19 名だった。

まず、篠原先生からは、受講生へのレポート課題の提示とレポートの回収とに C-Learning を利用する授業の実例についてご報告をいただいた。リレー講義「自然観察実習」の中の「天体観察入門」(講義 2 回)における実施例であり、受講生に出される課題は、実際の星空を肉眼で観察し、その結果をレポートにまとめて、C-Learning を使って提出することである。

C-Learning を利用すると便利な点として、受講生の名簿があらかじめ出来ていること、レポートの一

括ダウンロード(提出ファイル一括ダウンロード)をしたときに、自動的に学生番号を先頭とするファイル名が付けられることなどが報告された。

続いて、西村先生からは、アクティブ・ラーニングを使う授業は知識の定着率が高く、知識を応用する力が養えること、アクティブ・ラーニングの典型的な方法が反転授業であることが話され、反転授業を取り入れた英語の授業の実例が紹介された。

受講生にはあらかじめ英語のスピーチの課題(たとえば「自分の趣味」)が通知されており、授業の当日は、受講生が二人一組になり(ペアワーク)、各自のスピーチを交替で短いビデオに撮影する、さらにその動画を Google Drive に登録するのである。受講生は、その動画を自分も見ることができるので、自分の英語の話し方を自分で点検し、改善に役立てることができる。学生どうしが撮影し合う方が、教員が録画装置を向けるよりも学生は緊張せず、自然に近い英会話ができるというメリットがある。

さらに進んで、受講生が、英語のプレゼンテーションをパワーポイントにまとめ、それを英語でプレゼンする様子を動画に撮影して Google Drive に登録するという授業例も紹介された。そして、@komazawa-u.ac.jp の Gmail アカウントに付属している Google Drive に動画などのデータを無制限に入れられるという機能があり、この活用が強調された。

このほか、「新入生セミナー」において、受講生がグループで東京都内の各地に出かけて、現地で画像をとり、それをパワーポイントでまとめて授業中に発表するというアクティブ・ラーニングの実施例も紹介された。

そのあと、活発な質疑応答が行なわれた。

(経済学部教授・小林 正人)



(第 4 回 F D 研修会の様子)

## FD 推進委員会の今後の活動予定

○平成 30 年度第 6 回FD 推進委員会小委員会  
平成 31 年 1 月 22 日 (火) 14:00 ~

○平成 30 年度第 6 回FD 研修会  
平成 31 年 2 月 1 日 (金) 16:30~

テーマ:

平成 30 年度「学生が選ぶベスト・ティーチング賞」  
受賞科目にみる教育方法と教育活動の質の向上

○平成 30 年度第 7 回FD 推進委員会小委員会  
平成 31 年 2 月 22 日 (金) 14:00 ~

○平成 30 年度第 4 回FD 推進委員会  
平成 31 年 3 月 14 日 (木) 14:00 ~

※FD 活動についてご意見がありましたら、各学  
部等の小委員会委員までお申し出ください。

※駒澤大学FD (Faculty Development) ホームペー  
ジは、以下 URL か QR コードからアクセスできます。

【URL】 <https://www.komazawa-u.ac.jp/about/fd/>



### 編集後記

FD NEWSLETTER 第 57 号をお届けします。巻頭言は、  
入学センター所長の熊谷芝青先生にご執筆頂きました。  
夏のオープンキャンパスで実施される「模擬授  
業」は、来校された高校生やその保護者が参観する  
「公開授業」に相当し、高校生による好意的な目線  
と、保護者による少々厳しい批判的目線での意見が  
アンケートに寄せられることから、これを講義内容  
の改善・向上に活かすことによりFD に繋がること  
をご指摘されています。そして本号では、ちょうど  
その「公開授業」に関する記事を掲載しており、今  
期の公開授業をご担当された法学部の山崎望先生と

経済学部の館健太郎先生に、実施後の感想等につい  
てご執筆頂きました。科目や履修人数の多寡等によ  
って適切な授業形態やアクティブ・ラーニングの導  
入可否等の状況は異なりますが、お二方とも学生の  
知的好奇心と理解度・定着度を高めるために様々な  
工夫をされており、FD に向けた取り組みと熱意が  
伝わってまいります。

連載企画の「よりよい教育のために」では、経済  
学部の松本典子先生に、ゼミでのフィールドワーク  
を中心とした教育の在り方についてご紹介頂きまし  
た。教場内での授業だけでなく、地元の様々な行事  
への参加、ワークショップの企画・運営、各種プロ  
ジェクトの実施など、世田谷区内のNPO や協同組合  
などの非営利組織の方々に「市民先生」としてご協  
力頂き、一緒に学生を指導・教育されているとのこ  
と。アクティブ・ラーニングを積極的に取り入れた  
授業方法として、大いに参考になります。第 4 回FD  
研修会においても、アクティブ・ラーニングの手  
法について、講師をされた総合教育研究部の篠原正  
雄先生と西村祐子先生に、それぞれ C-Learning の活  
用や反転授業の実施例を中心にお話し頂きました。  
本号では、その概要についても記事を掲載しており  
ます。2012 年 8 月の中央教育審議会の答申により大  
学教育におけるアクティブ・ラーニングへの転換が  
打ち出されてから 6 年。その間に、本学においても  
アクティブ・ラーニング化が随分と浸透してきたこ  
とを実感いたします。

お忙しい中に本号掲載の記事をご執筆下さった先  
生方、公開授業及びFD 研修会の講師をご担当され  
た先生方には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。  
次号のFD NEWSLETTER 第 58 号は、ベスト・ティ  
ーチング賞や学生による授業アンケートの結果報告  
に関する記事を中心にお届けする予定です。

(小林 正人、塩入 みほも)

【タイトル横の写真は、  
平成 30 年度第 4 回FD 研修会での学長挨拶時の様子】

### FD NEWSLETTER Dec. 2018 第 57 号

発行日：2018 年 12 月 15 日

発行者：駒澤大学FD 推進委員会

〒154-8525 東京都世田谷区駒沢 1-23-1

TEL 03-3418-9444 Fax 03-3418-9114

(事務局：教務部)